2015 年度事業報告

2015 年度は多くの「節目」が重なった。当団体は、今年度、2005 年 10 月 6 日に NPO 法人として設立後 10 年、モザンビーク支援は任意団体の時から数えて 15 年になる。モザンビークの「銃を鍬に」平和構築プロジェクト自体は、開始以来 20 周年であり、同国の独立 40 周年とも節目が重なっている。

日本では、戦後 70 周年という大きな節目の年を迎え、改めて「平和」への道のりに注目が集まった。世界では、2000～2015 年の 15 年間、先進国が途上国を支援するべき 8 つの項目を決めた「MDGs（ミレニアム開発目標）」の最終年を迎え、2015 年 9 月には、このミレニアム開発目標の次なる世界的・地球規模的開発目標として、「SDGs（持続可能な開発目標）」が米国・NY の国連で採択された。

そこで、今年度は、節目に相応しい新規イベントとして「モザンビークデー」を実施し、「モザンビーク」と「ESD（持続可能な開発のための教育）」をキーワードにつながっている沢山の方々に集まって頂き、それぞれの学びや取り組みを共有し、「可視化」した。日本全体で考えても、まだ、アフリカは遠い存在だが、今後、この「モザンビーク」と「ESD」をキーワードに、一堂に会する機会を広く市民に提供し続けることで、アフリカ理解の一助を担うと同時に、地球規模の環境課題・開発問題の本質的解決・改善に向かうための「本物の気づき・学び」を創出したいと願っている。

足元の「四国地域」に目を移してみると、今年度、環境省四国環境パートナーシップオフィスの企画運営業務も設立準備期間を含めて 10 年目となる節目を迎えた。『四国の ESD　3 年間のあゆみ』の冊子編集では、関係者の方々やスタッフの強力かつ熱心な協力の元に、四国中の ESD に関する情報・取り組みなどを包括的にまとめることができ、四国中の全小・中学校に届けることができた。「四国 ESD 実践者集会」や「ユニバ ESD」のフォローアップ会議参加者も含め、四国では、幅広い年代層を巻き込んだ多様な ESD の仲間ができつつあることを実感できた。冊子づくりを通じて、その広がりや課題を俯瞰・把握できたことを心より感謝している。

そして、外務省 NGO 相談員事業の一環で取り組んだ『グローバル・ローカルかるた』の作成については、多くの小・中学生、高校生、大学生など、10 代の若い世代の方々の参加・協力を得て仕上げることができた。かるたの言葉を選び、意味を考え、伝わるように説明文を書き、絵のイメージと重ねる中で、人々の願い、思い、考えなどを束ねる作業を行った。この動きの中から得られた成果（宝物）は、「ユースとの協働」だった。この動きと並行し、地球環境基金の助成金事業で、モザンビークやネパールを訪問し、アジア・アフリカとつながる四国の SDGs を考える勉強会を重ねていく中でも、「ユース」を中心とした四国のネットワークが生まれてきた。高校生たちが私立・県立・国立のカベや県域のカベを超えようと動き出している。新たな担い手・リーダーとなる力をつけていくプロセスを見守りつつサポートできればと思う。

最後に、今年度、会報や活動10年誌に取り組めなかったことを猛省しお詫びしたい。活動の「継続」は、とても重要なのに、あいにく簡単ではない。今年度は、当団体にとって、大切な節目の 1 年だったことを踏まえ、これまでに出会い、関わり、気づき・学び合い、「持続可能な市民社会づくり」に向かって共に歩んできた仲間の存在に改めて感謝し、さまざまな形で支え、共に動いて下さった会員・関係者・ボランティア・理事・スタッフ全員にお礼を申し上げ、2016 年度からは、また、次なる10年の取り組みをイメージしながら歩みを進めていこうと思う。

カニマンボウ！（モザンビークのローカル言語・シャンガーナ語で「ありがとう」の意。）

特定非営利活動法人えひめグローバルネットワーク　代表　竹内よし子

Ⅰ. 国際協力事業

1. モザンビーク海外支援事業

【モザンビークにおける活動】

① 縫製訓練プロジェクト

- シニャングァニーネ村の女性を対象とした裁縫訓練を行った。当団体が 2008 年に愛媛に招へいした元研修生のアデリア、クリミルダを含む 10 名の女性が参加し、2015 年 9 月に米国・NY の国連で採択された「SDGs（持続可能な開発目標 2016-2030）」の文字とマークの意味を説明しながら刺繍訓練を開始した。
- 「ESD（持続可能な開発のための教育）」の刺繍を作成した 2 年前に比べ、細かい作業や新しい刺繍の刺し方を覚えなければならなかったものの、練習を重ねることで丁寧に仕上がり、作業時間短縮ができるようになった。ポル語・英語通訳ができるスタッフ・インターンにより、女性たちとの会話も増え新たな参加者を得ることができたほか、女性の雇用機会への期待・ニーズの確認を行うこともできた。
- また、このような刺繍訓練の機会のように、女性たちが学びながら働くことができるよう、女性 3 名（クリミルダ、ザイーダ、アナベラ）が「TUANANO（トゥアナーノ）（現地語・シャンガーナ語で「フレンドシップ」の意）」というグループを結成した。当団体は、今後、公民館建設が完了した際に運営団体として運営を託す団体となり得ることから、このグループの活動の支援を検討することとした。

② 公民館建設

- シニャングァニーネ村公民館建設を進めるため、アモッセ・モザンビーク事務所長とのスカイプ会議を頻繁に行い、見積もりやスケジュール確認を行ったが、最終的な合意には至らなかった。
- しかし、今年度の乾季の間にインコマティ川の近くで、住民参加型によるコンクリートブロック製作（約 1,600 個は確認済）を行い、雨季で川が氾濫する前に人力で建設地へ運んだ。この作業は今後も継続する。
- また、9 月中、当団体スタッフが訪問した際には、本公民館建設の技術担当者であるマニュエルと共に、住民や子どもたち、元 EGN 研修生（アデリア、クリミルダ、ベネット）、当団体・学生インターンなどが参加して建設地の草木の除去、土台づくり、ロープ張りなどの作業を進めた。
- モザンビークでは、毎年約 7～8%の経済成長に伴い、年約 4%の消費者物価上昇や首都マプト州内の建設ラッシュが続いていることから、建築資材や人件費が予定以上にかかる上に、資材・人材の確保も困難となってきている。そのため、今後の展開については、愛媛大学のモザンビーク人留学生（建築家）のアドバイスも得ながら進めていくこととした。

③ 象の脅威に関するヒアリングの実施

- 象の脅威に関するヒアリングは、早朝・夕方に象が飲み水、好物であるマサラという果物を求めて村に入ってきていることや、畑に足跡を残していることなどが分かった。

- また、南アフリカ共和国のナショナルパークの塀が壊れていることから像がモザンビークに来ているという情報も得たが、実態を確認することはできなかった。
- 象の動向に関する専門知識や調査に必要な道具等の不足から、実態の把握は非常に困難であり、動物保護活動を行っている団体との連携等が不可欠であることから、今後も勉強会などを通して検討を重ね、連携先団体を模索していくこととした。

④ モザンビーク事務所の整備

- アモッセ・モザンビーク事務所所長と連絡調整を重ね、モザンビーク国内の NGO 登録（仮登録から本登録）手続き、並びに銀行口座開設に向けて整備を進めたが、諸事情により実現しなかった。
- また、現地で事業展開のステップアップを図るため、JICA「帰国隊員 NGO 活動支援制度」等を活用した適任者の選出と採用、配置を目指したが実現しなかった。

⑤ CCM（モザンビークキリスト教評議会）・学校・マグアーサ孤児院等との連携促進

- 9 月 11 日～23 日に竹内よし子（代表）、髙山莉菜（職員）、山下貴史（香川大学学生）、小松柊成（大阪産業大学学生）、田村優（新潟大学学生）がモザンビークを訪問した。
- CCM のジッタ氏とガザ州マシエネ・シャイシャイ地域のコミュニティを視察した。この地域にあるアートセンターでは、かつて草木染、刺繍、バナナペーパーづくりなど、フェアトレード商品の製作・販売を行っており、「持続可能なコミュニティづくりのモデル」として何度も訪問して情報収集を行ってきたが、一昨年、プロジェクト支援団体が撤退したことで、閉鎖していたことが明らかとなった。このことから、外部支援の在り方や、組織自体の持続可能な資金調達の仕組みづくりの難しさを改めて認識し、シニャングァニーネ村の取り組みに活かすこととした。
- CMM 代表のマカモ氏と面談し、これまで 20 年間に渡って取り組んできた「銃を鍬へプロジェクト」平和構築活動をひとつの記録としてまとめ、平和学習教材として普及していくことについて意見交換を行った。さらに、今年度日本国内で実施される武器アート展に関する情報共有とともに、武器アートを活用した商品の開発についても報告・意見交換を行った。
- マプト市内にある「2 月 3 日小学校（2 月 3 日は、モザンビークのヒーローであるモンドラーネ氏が亡くなった日）」を訪問し、校長先生との面談を実施した。これまで、日本・モザンビーク市民友好協会との連携で野球交流を実施してきていることから、松山市立新玉小学校、清水小学校、東雲小学校等との友好交流、またその方法について意見交換した。また、当団体が支援するシニャングァニーネ村の小学校との交流が続けられる仕組みができないかということを提案し、今後検討を進めていくこととなった。
- 平成 27 年度環境省「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係る ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務（四国地域）」の一環で、清水小学校 6 年生が作成した絵はがき、うちわを「2 月 3 日小学校」「シニャングァニーネ小学校」に贈った。また、シニャングァニーネ小学校児童が描いた絵は清水小学校に贈ることで、交流のしるしとした。
- シニャングァニーネ小学校では、今年度、モザンビーク政府の教育環境を整える動きとして、①児童用トイレが戸外に設置、②机と椅子セットが支給（但し、学校のドアと窓がないままで

あるため、重い机・椅子セットは、毎日、児童が倉庫から運んでおり、負担となっている）、③児童に給食（ソージャという大豆のおかゆのようなもの）の提供が新たに行われるようになっていた。

机・イスのセットを運ぶ児童

- 学校訪問時には、新玉小学校、清水小学校、愛媛信用金庫等より寄贈された文房具（ペン、色鉛筆、はさみ、ものさし、カッターなど）や絵本などの物資を贈った。
- 児童に色鉛筆を使って「将来の夢」をテーマにした絵を描いてもらった。画用紙には、学校、草木・牛、テレビ・ラジオ、車・トラックなどが描かれ、それぞれ、教員、農家、DJ、運転手になる夢を、新玉小学校、清水小学校児童に伝えることでさらに交流を深めることができた。

ジョシナ・マシェル高校訪問

- 日本の高校との交流を希望しているマプト市内の「ジョシナ・マシェル高校」を訪問し、学校長、教員と意見交換を行った。スーパーグローバルハイスクール（SGH）に認定されている愛媛県立松山東高等学校、国立愛媛大学附属高等学校等の生徒との交流について提案し、今後どのような交流が可能か、生徒の意見も取り入れながら進めていけるよう計画を検討していくこととなった。
- 元研修生のアデリアの勤務先であるマグアーサ孤児院を訪問し、2012 年に寄贈したミシンの活用状況を確認したところ、一部破損して修理が必要であったため、マプト市にて修理が可能かどうか確認した上で改善案を検討することとした。

【日本国内における活動】

① モザンビーク勉強会・帰国報告会の開催

- モザンビークスタディツアー実施前に、参加者とモザンビーク人留学生を交えて勉強会を行った。
- 帰国後は、各種学校における国際理解教育、10 月 4 日のモザンビークデーなどで報告を行った。
- また、2016 年 3 月 8 日（火）には、スタディツアーに参加した大阪産業大学・学生インターンの母校である新居浜市立角野小学校にて帰国報告会を行うことができた。地域で育った若者がグローバルな視点を持って国際協力活動、ESD の取り組みに関わっていることを母校の児童に伝え、モザンビーク支援活動についても紹介し、グローカルな視点を持つことが重要であることを発信する機会となった。

② 武器アート展示

- 以下の通り、博物館・美術館・大学等の機関や学生・市民団体との連携により、「武器アート展」を全国で開催するとともに、武器アート専用の HP（http://mozambique-art.com/）を作成し、展示会の情報を中心とした情報の発信を行った。
- 松山市が開催する「平和資料展」への展示協力を行い、武器アート、モザンビークの子どもの絵、平和関連資料の掲示を行った。
- 武器アートについて、もっと周知できるよう、東京の渋谷高校生からの提案を活かした商品開発（ポストカード、クリアファイル、キーホルダー2 種）を通じて、武器アート展示の普及啓発を行った。
- 作成した商品は、武器アート展の会場、フェアトレード雑貨販売ショップ、高校での文化祭などで販売した。

ア.　第 23 回葉山芸術祭企画展「Life is beautiful！−モザンビークと武器アート−」

開催期間：2015 年 4 月 30 日～2015 年 5 月 10 日
場　　所：カラバシ、SPACIA470（神奈川県三浦郡葉山町）
主　　催：第 23 回葉山芸術祭実行委員会
協力内容：本企画展については昨年度より開催に向けた準備を進め、今年度実施に至った。武器アートの輸送方法など担当者と検討を重ね、作品 9 点と写真などの資料を貸出した。5 月 9 日には、同会場でギャラリートークを実施し、参加者に銃を鍬へプロジェクトをはじめとするモザンビークの平和構築活動について普及を行うことができた。

イ.　武器をアートに　モザンビークにおける平和構築

開催期間：2015 年 10 月 17 日～2015 年 11 月 23 日
場　　所：東京芸術大学大学美術館（東京都台東区）
主　　催：人間文化研究機構国立民族学博物館、
　　東京芸術大学
協力内容：2013 年に国立民族学博物館で開催された武器アート展に続き、今回で 2 回目の協力となり、作品 15 点を貸出した。さらに、同会場のミュージアムショップにおいて武器アートグッズを初めて販売することができ、自主事業の基盤強化につなげることができた。また、国立民族学博物館が作成した資料集「武器をアートに」増補版では、当団体が所有する武器アートが表紙を飾ったことで、さらなる広報につながった。

ウ.　武器アート展　モザンビーク内戦からの出発

開催期間：2015 年 11 月 28 日～2016 年 1 月 11 日
場　　所：神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）（神奈川県横浜市）
主　　催：あーすぷらざ
協力内容：昨年度 3 月に武器アート貸出の依頼があり、作品 15 点と関連資料を貸し出したほか、愛媛県と松山市が所蔵する武器アートも展示された。12 月 12 日には「武器アートにみる、モザンビークの過去、現在、未来」というテーマでギャラリートークを実施した。さらに、武器アートグッズの作成を提案した渋谷高校生と主催者との意見交換も行い、企画展開催期間中に学生がグッズ販売のボランティアを行うなど、新たなつながりを生むことができた。

エ.　武器をアートに　モザンビークからのメッセージ

開催期間：2016 年 1 月 16 日～2 月 21 日
場　　所：新潟大学駅南キャンパス
　　ときめいと（新潟県新潟市）
主　　催：「武器をアートに」新潟実行委員会
協力内容：今年度 9 月にモザンビークに同行した新潟大学の学生インターンが中心となって企画し、作品 15 点の貸し出しを行うとともに、輸送方法などの相談にも対応し協力を行った。音楽イベントやトークイベントなども併催され、

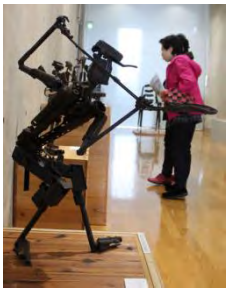
学生主体の企画に対し、メディアからの注目も集まり、多くの取材を受けた。また、この企画がきっかけとなり、国際大学と池田記念美術館における展示につながった。

オ.「武器をアートに」展示会

開催期間:2016 年 2 月 26 日～2 月 28 日、3 月 3 日～3 月 29 日
場　　所:国際大学 MLIC ホール(新潟県南魚沼市)
主　　催:国際大学、池田記念美術館
協力内容:短期間での開催準備となったが、新潟大学の学生インターンとの連携により、作品 15 点の貸し出しを行うことができた。2 月 26 日には国際大学において「ESD と地域づくり」というテーマでオープンセミナーを行い、国際大学に留学しているモザンビーク人 8 名と交流することができた。

カ. 特別展示「武器をアートに」

開催期間:2016 年 3 月 3 日～3 月 29 日
場　　所:池田記念美術館(新潟県南魚沼市)
主　　催:国際大学、池田記念美術館
協力内容:国際大学、「武器をアートに」新潟実行委員会との連携により、展示会を開催した。展示会に合わせて、同会場にて武器アートグッズの販売も行うことで、来場者に普及啓発を行うことができた。



③ 公民館建設に向けたファンドレイジング

- 公民館建設のための寄付を、会員や一般向けに呼びかけた。
- 新玉小学校 6 年生、清水小学校 6 年生が公民館建設のための募金活動、支援物資の回収を行った。
- 愛媛県内の店舗で「募金箱の設置協力」を依頼し、これまでに引き続き協力を呼びかけた。

2. フェアトレード普及・促進事業

①フェアトレード商品等販売

- 本部事務所の入口部分のスペースにおいて、フェアトレード商品の展示・販売を行った。
- 「協働オフィス」における、フェアトレード商品、フェアトレード応援商品、311 震災支援商品等の展示・販売コーナーの整備、販売について検討を行った。
- 松山東高校、西条高校、済美平成中等教育学校等の生徒たちの協力により、各校の文化祭においてフェアトレード商品や武器アートグッズの販売を行い、普及啓発を促進した。
- 松山工業高校の生徒たちとの連携により、マサラを活用した新たな商品(スピーカー、ソーラーランプ)開発に取り組んだ。
  昨年度、同校が取り組んだマサラ・ライトについては、(一社)照明学会四国支部主催・四国照明デザインコンテストで最優秀賞を獲得しており、ESD 教材づくりを考えるワークショップ等で展示し、活用した。
- シニャングァニーネ村で取り組んだフェアトレード商品「くるみボタンのヘアゴム」の販売、PR を行った。
  また、今年度、シニャングァニーネ村で作成した SDGs の刺繍の教材化と商品化に向けて試作品を作成し、使用方法や改善の検討を行った。

②イベント企画・出店

- 国際協力・環境保全などの普及啓発、フェアトレードの理解促進、ネットワークづくり等のため、各種関連イベント等への企画・出店を行った。

③資料貸出し・広報協力

- 国際協力関連資料の整理を行い、利用者への貸し出しを行った
- 他団体の活動の広報等に協力し、掲示、メール、HP などを活用した広報協力を行った。

④ボランティア・視察等の受入

- 松山東高校 SGH 部、済美高校、北条高校、愛媛大学附属高校、阿南工業高等専門学校の生徒などをボランティアとして受け入れ、フェアトレードの普及・促進を行った。

⑤平和記念事業「モザンビークデー」の開催

- 2015 年は、さまざまな節目が重なったため、新たな記念事業開催を企画した。節目となったのは、以下の通り。
  ①当団体の法人設立 10 周年
  ②モザンビークの支援を開始して 15 年
  ③モザンビーク「銃を鍬に」プロジェクト 20 周年
  ④モザンビーク独立 40 周年
  ⑤日本の戦後 70 周年
  ⑥MDGs（ミレニアム開発目標）最終年
  ⑦SDGs（持続可能な開発目標）採択決定
  また、駐日モザンビーク共和国大使館のマラテ特命全権大使が任務を終えて帰国することとなったこともあり、10 月 4 日、モザンビークの「平和の日」であり、日本・モザンビーク市民友好協会設立記念日であることから、愛媛大学モザンビーク留学生などと協力して「モザンビークデー」イベントの企画・運営を行った。また、この企画は、モザンビーク関係者が一堂に会する機会、相互に交流する機会として今後も継続することとした。
- 当日は、マラテ特命全権大使ご夫妻とご子息、国会議員、松山市長、愛媛信用金庫役員、愛媛大学附属高等学校校長、新玉小学校や清水小学校の校長や教員、新玉公民館館長、愛媛大学のモザンビーク人留学生、学生、生徒など関係者約 80 名が参加。山本順三氏（参議院議員・アフリカ連合議連モザンビーク担当）、野志克仁氏（松山市長）、壽卓三氏（愛媛大学附属高等学校校長）より、松山とモザンビークとの友好交流のさらなる発展と継続を願う挨拶をいただいた。
- 学校・団体等の取り組み紹介として、松山市立新玉小学校、清水小学校、愛媛県立松山東高校、愛媛大学附属高校、愛媛大学の関係者が活動発表を行った。モザンビークに関する学びや交流などを通して、持続可能な社会構築のために自分たちに何ができるか考え、工夫し、実践している様子を、マラテ大使はじめ多くの参加者に紹介することができた。
- モザンビークに関わる多くの関係者がモザンビーク、日本、世界の平和を考えるイベントとなり、来年度以降も 10 月に「モザンビークデー」を設け、モザンビークとの市民友好交流を目的に継続して開催していくこととなった。

Ⅱ. 環境保全事業

1. 環境省・四国環境パートナーシップオフィス企画運営委託事業

①持続可能な社会の実現に向けた協働取組の支援

- NPO/NGO と企業（製造業や小売販売業当）、JA、福祉団体や行政並びに教育関係者、社会教育施設（公民館や自然系博物館）等との連携推進のため、会合や講演及び勉強会への参加や情報収集を通じて協働取組に意欲のある NPO/NGO に役立つ情報収集やニーズ把握を行った。
- NPO/NGO の協働先となり得る企業や行政並びに教育関係者、社会教育施設等の会合や講演などに参加し、参画者とより深い情報交換やニーズ把握が進み、円滑な運営支援を行うことができた。
- NPO/NGO と企業や学校、社会教育施設等との連携推進のため、NPO/NGO に対し交流可能な場に関する情報提供や参加促進を行った。直接のメールや電話以外にラジオ放送出演やエコプロダクツ展出展等により積極的な広報を行った。
- グローバルアクションプラン（GAP）推進における優先課題であるユース世代との連携を模索するために、高知工科大学インターンシップ生の受け入れを実施した。（写真：ココカラハウスでの講演、高知工科大学インターンシップ）

②四国環境パートナーシップ大会の開催

- 運営委員の提案で、物部川地域での開催について検討し、1 月 29 日に四国環境パートナーシップ大会 in 高知を開催した。開催にあたっては、環境省の「つなげよう、支えよう森里川海」ミニフォーラム in 高知・物部川との連動を図り、四国の企業、大学、NPO 関係者からの事例紹介を計画した。
- 3 月 5 日に四国環境パートナーシップ表彰を実施。運営委員や中間支援組織等に参加協力を仰ぎ、各県からの推薦を含め、この 3 年間の環境パートナーシップ活動に貢献した活動に感謝状を進呈した。
- 3 年間でさまざまな主体の連携による環境パートナーシップ活動は広がりを見せ、協働で事業を進めたいというニーズの高まりを確認した。今後の更なる推進のきっかけとしたい。

（写真：四国環境パートナーシップ大会表彰式の様子）

③ESDによる取組の強化と促進

- ESD に関して、これまで行ったことのない個人や団体が ESD を行うことができるよう、相談等の支援を行った。学習指導要領にも明記されるため、プログラムガイドブックなどの冊子での紹介や教材作成支援など、段階に応じた支援を行った。
- 3 年間の ESD 環境教育人材育成プログラム事業の実施を通じて四国におけるESDネットワークを構築し、学校等の研修や実践プログラム等の情報共有や具体事例等を通した ESD のポイントについての理解促進を行った。また、外部講師の活用や担当教員とのつながり、ユネスコスクールへの発展など、年度ごとに実施された実証が、確実に次への展開につながっていることが分かった。今後の ESD 推進に向けて、各県や流域、地域などまとまった単位

でのネットワークの形成と定期的なつながりあるいは、交流の仕組みづくりの重要性を認識した。

- 四国の ESD 情報及び「四国のすごい」、「四国のいいね」の事例を多言語化（英語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、中国語）し、四国 EPO の Web サイトで見ることができる環境を整備した。
- 「平成 27 年度環境教育プログラム実証等事業」において、四国地域での事業実施支援を行うとともに、その成果をパネル展示やイベント等での資料配布、教員向け研修でのDVD活用等を通じて発信した。
- 「地域環境活性持続講座（仮称）」実現に向けて、愛媛大学地域協創学部や松山市との協働事業を通じての情報交換や愛媛以外の大学での講座開設可能性について関係者への打診を行った。
- ユネスコスクールに登録されている小中学校等の調査として、新居浜市内を中心に訪問調査を行った。その他、高知県の清和女子中高等学校や徳島県の池田中学校へのヒアリングを行い、現状や課題の把握を行った。
- 持続可能な社会をテーマとしたワークショップとして、EPO 東北との連携により、震災の経験を四国に伝える再生可能エネルギー勉強会を松山市で開催、その他、四国内の NPO とセーブ・ザ・チルドレン、内子町と連携して、SDGsに関する市民フォーラムを開催した。その他、森里川海をテーマとしたミニフォーラムなどを開催し、四国内での新たなつながりと新たなテーマに関する関心を喚起することができた。

（写真：ESD実践者集会の様子）

④地域活性化に向けた協働取組の加速化事業支援

- 「平成 27 年度地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」において、四国地域で採択された団体（2 団体）に対し、支援事務局として当該事業に参画し、支援を行った。また、支援スキル向上のために、関東 EPO で協働をテーマとしたインターン研修に参加。伴走支援のノウハウを取得し、実践に活かした。
- 採択団体の活動をホームページ等で周知するとともに、採択団体が作成することになっている協働カレンダー、中期計画（3 カ年のロードマップ）の作成を支援した。 （写真：森からつづく道主催、見学会の様子）

⑤中間支援機能の強化

- 四国地域内の中間支援組織等と連携し、生物多様性の保全、地球温暖化防止、ESD、減災社会づくり、持続可能な社会づくりなどの共通課題をテーマとした事業支援、協働実施、助言等を行った。
- 四国内でこれまで中間支援等の活動ができていなかった地域として、四国東部地域の掘り起こしに焦点をあてた活動を行った。その結果、徳島県立博物館との連携や地球環境基金事業に採択された漁師の NPO 等への取材の実現とともに、徳島県阿南市での生物多様性活動から発展した、「つなげよう、支えよう森里川海」フォーラムにつながった。
- 四国地域内の NPO/NGO 等における環境保全活動等に関する事業の協働実施を促進するため、高松地方気象台のパネル展示や愛媛県制作冊子の配布、高松市環境局主催展示会への出展協力、外務省 NGO 相談員関連事業等の行政機関による支援情報の受発信を行った。
- 「四国のすごい」や「四国のいいね」事例収集のため、NPO/NGO 等関係者や運営委員協力による情報提供やヒアリングを実施し記事作成を行った。
- 四国管内の休暇村（休暇村讃岐五色台、休暇村瀬戸内東予）やビジターセンター（五色台ビジターセンター）との連携を深め、高知工科大学インターンシップ生 4 名の受け入れと「香川のディープな生き物たち」展示会の共催、森のこども祭り実施サポート、エコプロダクツ展での紹介資料の配布等を行った。
- 四国内の広域で同じ活動が行われている事業、「森里川海」事業や「とさっ子タウン」など特定の地域において行われている四国各地で取り組むべき事業について実施支援を行った。

- 環境教育等促進法に基づく協働取組や協働の場等が必要となる情報を四国内の小中学校やNPO/NGO 等に提供した。

⑥政策提言支援

- NPO/NGO や企業、市民等を対象とした環境政策や環境政策提案に関する勉強会を実施した。今年度は、ESD国内実施計画に関するパブリックコメント勉強会を北海道 EPO と協働で実施した。
- 政策提言に関する相談を受け付け、情報提供や助言を実施する。支援案件の中で政策提言につながったものはないが、自然資本のモノサシ化提案等について引き続き支援を続ける。

⑦情報収集及び発信とさまざまな主体等が交流する機会の提供

- 動画接続を活用し、講座の開催や相談窓口の設置、会議、助成金説明会、イベント等を開催した。
- HP、メルマガ、フェイスブック、紙媒体等を活用して情報発信を行った。HPリニューアルにより閲覧数が増加した。
- 新聞等から入手した環境情報のデータベース化を行った。また、データベース化だけでなく、記事の活用方法について紹介を行った。
- 来所や電話による相談への対応を実施した。
- 高知での事業が円滑に実施できるよう高知事務所開設に関する準備を行い、各県拠点整備に向けてのノウハウを取得した。

２．日本ＮＰＯセンター委託・グリーンギフト支援

- グリーンギフト支援事業として、徳島県内の実施団体であるNPO 法人新町川を守る会と東京海上日動火災保険㈱徳島支店のマッチングを行い、徳島駅ならびに新町川周辺の道路清掃と花壇の手入れ、花植えイベントの実施を支援した。
- NHK ラジオ番組「おはよう四国」において、本事業の広報を行い、企業と NPO や市民連携の促進を PR した。

3. 大川清掃・観察会活動から環境学習への展開

- 松山市立清水小学校 4 年生を対象とした大川に関する授業を 6 月に実施し、ESD の実践の場としてサポートを行った。
- また、大川に関する情報・資料収集を行い、同校 6 年生が ESD モデル事業で実施した「違う国でも同じこと」のプログラム展開でつながっていくよう、授業モデル案について検討すると同時に、今後、大川の環境学習が川の流域で校区を超えてつながっていくことができるよう資料や写真の整備を行った。

4. 東雲公園ESD・環境保全・学びの場づくり活動

- 東雲公園の一部をコミュニティファームとして利活用することを通じて、①東雲小学校児童の継続的な環境学習の場づくり、②東雲町内会で新たなコミュニケーションが生まれるコミュニティの場づくり、③第一次避難場所指定を受けている公園を軸とした防災・減災社会づくりに役立てることを目的とし、NPO、学生などと連携しながら活動を行った。
- 渡部寛志氏（NPO 法人えひめ 311 代表）指導の下、地域の大学生などと連携しながら畑の運営を行った。今年度は、ジャガイモ、大根などの野菜を栽培し、12 月に実施した「東雲インターナショナル防災」イベントでの炊き出しに活用することで、参加した市民に配布することができた。
- 野菜の収穫作業を行うにあたり、平成 25 年度「環境省持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係る ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務（四国地域）」でサツマイモづくりを行った、松山市立東雲小学校の 4 年生児童に参加を呼び掛けたところ、2 名の児童が参加した。普段、土に触れたり畑の世話をしたりする経験がないため、土の感触や野菜の形、大きさ、葉っぱの色などを興味深く観察しながら収穫している様子がうかがえた。参加した児童は、「楽しかった」「また参加したい」との感想を寄せ、今後も地域の畑として活用するためにどのような方法が有効か、検討していくことの必要性を確認した。また、収穫した野菜は、東雲小学校の 4 年生全員に配布し、公園のコミュニティファームに関心を持って、今後の活動にも参加してもらえるよう文書を添えた。

5. 持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係るESD環境教育プログラムの作成・展開業務

- 平成 25、26 年度、本事業の実施を担ってきた経緯を踏まえて、本年度の事業終了後もその取り組みが継続的に発展・展開できるよう、四国地方の持続可能な地域づくりを担う人材育成づくりと四国地方の ESD 推進ネットワークづくりを目指し、平成 27 年 8 月 10 日より平成 28 年 3 月 28 日まで、環境省がとりまとめた 55 の ESD モデルプログラムを基に、四国各県（徳島県、香川県、愛媛県、高知県）の地域性を踏まえた小・中学生向けの「地域版 ESD プログラム」を、各県のキーパーソンと四国 EPO と連携しながら作成し、地域版 ESD プログラムの実証ならびに評価を行うとともに、平成 25、26、27 年度の 3 年間の実証のまとめを行った。
- 今年度は、GAP の優先行動分野とも合致する新居浜市が先進的に取組む「面的アプローチ」の手法を取り入れ、本事業四国 ESD 実行委員会委員とともに、特に教育委員会との連携による研修開催に努め、実際に、徳島県阿南市教育委員会、香川県善通寺市教育委員会、愛媛集団学習研究協議会とともに多数の教員を対象とした研修の開催が実現し、まさに面的な ESD の普及・啓発に取り組むことができた。
- 3 年間かけて取り組んできた四国 ESD 実行委員会関係者と四国 EPO 運営委員、つまり、四国内の ESD キーパーソンが一堂に会する「四国 ESD 実践者集会」の開催による人的交流が実現した。四国地方で ESD を推進・展開していくための本質的な課題や改善案も明らかになり、今後も継続して取り組むべき四国地方の ESD 推進ネットワークづくりの基盤構築につなげることもできたと同時に、関係者間で「四国 ESD ネットワーク（仮称）」発足のイメージを共有することができた。

- 「四国の ESD 3 年間の歩み」の冊子をまとめる作業を通じて、3 年間の地域版 ESD プログラムづくりの包括的なまとめと合わせて、点在していた四国のユネスコスクールや ESD に関する多様な情報を包括的に整理することができたほか、今後、小・中学校関係者による自発的な相互連携が生まれる可能性を高めることができた。
- 全国事務局主催「全国連絡会」および「ESD 成果報告会および交流会」、中国四国地方環境事務所主催「西日本 ESD 交流会」に本事業代表者が出席して、積極的に必要な情報提供等を行ったほか、中国四国地方環境事務所高松事務所主催「ユニバ ESD 四国大会」や四国内の ESD 関連イベント等に積極的に参加して、本業務の広報と ESD の普及啓発に努めた。

以下はその詳細である。

① 地域版 ESD プログラムの作成、実行委員会の設置およびワーキンググループの設置開催

- 本業務を効果的に実施するための業務実施体制を整え、本実行委員会を設置する前段階で、各県ごとの地域の事情に合わせた ESD の取り組み・展開に関する議論・調整を重ねると同時に、各県とも今回の ESD モデル展開が一過性のものとならず、学校・地域で根付くよう十分に配慮しながら、実行委員とともに地域版 ESD プログラムを実証する小・中学校の選定を行った。
- 有識者、NPO、メディア関係者、行政・教育関係者等を委員とし、実行委員会を設置した。実行委員会は、第 1 回実行委員会（平成 27 年 10 月 7 日、四国 EPO）および第 2 回実行委員会（平成 28 年 3 月 4 日、高松センタービル）の計 2 回開催し、事業計画全般の確認、地域版 ESD プログラム作成者との意見交換を行った。第 2 回実行委員会では、四国 EPO との連携により四国 EPO 運営委員会委員の参加を得て、四国の ESD に関する情報共有・人的交流が深まるよう配慮して開催することができた。
- プログラム作成のための各県ワーキンググループ委員会は、大学教授をチームリーダーとして各県 4～6 名で構成して設置し、ワーキンググループ会議を各県それぞれ 3 回開催した。会議では、実証校の選定および調整、モデルプログラムの地域化のための検討および地域プログラムの作成、実証による成果・課題の意見交換を行ったほか、実証授業への参加についても、さまざまな調整を行った。

②地域版 ESD プログラムの実証

- 各県とも検討・作成の段階より、ESD の理念に沿い、地域特性を踏まえたものとなるよう、また、学校等の教育現場で実施しやすいものとなることを目指し、基のプログラムを地域課題に合わせて工夫しながら、それぞれ参加者、実行委員会委員等の意見を汲み入れながら作成して実証した。作成したプログラムの内容は以下の通りである。

【徳島県：アフリカの現状から学び、地球規模の視野を育もう】

対　象：徳島県立富岡東中学校 3 年生
内　容：「水」、「経済」、「食料」、「健康・安全」をテーマに自分たちの身近な問題と途上国の問題について学び、調べた内容について、発表を行う。アフリカから徳島を訪れている JICA 研修生を学校に招き、現地の生活や現状について生きた情報を得、相互交流することによりアフリカの国々と日本との違いなどついて改めて考える機会を作る。アフリカで NPO 活動を行う徳島県の団体の活動紹介を聞き、気づいたことから自ら課題を見つけ、持続的な社会をつくるために自分たちに何ができるかを考え、行動する力を養う。

【香川県：自分と身近な自然とのつながり】

対　象：善通寺市立筆岡小学校 3 年生

内　容：昔の自然から今の身近な自然の変化までを感じる活動を通して、自然の多様性や相互のつながり、関わりに気づくプログラム。紅葉を迎えて、葉っぱや樹木の姿が変化をすることに気づく。学習発表会で使用する樹木模型の作成。演劇「赤いろうそく」や「まっかな秋」「ふるさと」など合唱する。校内、保護者や地域の人々に向けて発表して、自然をより身近なものとして、人と自然が共生するイメージを共有する。

【愛媛県：ちがう国でも同じこと】

対　象：松山市立清水小学校 6 年生

内　容：留学生や NGO 等との交流を交えながらグループに分かれて愛媛で継続して交流しているネパール、モザンビークの 2 か国について調べる。日本と比較しながら、世界にはさまざまな衣食住などの文化、自然災害があることを学んだうえで、それぞれの国で何が「同じ」なのかを考え、自分たちにできることや感じたことを実践し発表する。

【高知県：未来の種】

対　象：清和女子中学校 1～3 年生

内　容：食と農をテーマに、日本で昔から使われてきた種や植物の力を活かす土づくりについて学ぶとともに、生徒が収穫した穀物からお菓子をつくり、学園祭で販売する。また、収穫した種を未来に継ぐ活動を行うため、メッセージを添えて在来種の種を商店街で配布するとともに、次の年度に引き継ぐための種まきを行う。

③地域版 ESD プログラムの検証

- 実行委員会実行委員長および各県大学教員を検証委員会委員として設置し、四国 EPO と連携しながら、第 1 回四国 ESD 検証委員会（平成 27 年 10 月 7 日、四国 EPO）、第 2 回四国 ESD 検証委員会（平成 28 年 1 月 22 日、四国 EPO）を開催した。本事業が平成 25 年度より平成 27 年度までの 3 カ年度事業であったことに鑑み、事業成果を踏まえた「ESD プログラムの効果」の検証を行うため、第 2 回検証委員会においては、3 カ年の事業を振り返りつつ、多様な評価の手法と、評価そのもののあり方やあるべき方向性について十分な意見交換・議論ができるよう工夫して実施した。

④人材育成のためのワークショップの実施等

- 各県地域内連携および地域間連携で ESD 推進基盤となる四国の ESD 推進ネットワーク形成のため、教職員や学生、NPO 等を対象とした ESD 研修・ワークショップ開催のためのさまざまな調整を行い、各県で ESD 研修を実施した。
- ワークショップの内容は、本事業を支える教育関係者を主な対象とした資料・技術の支援をするものと、プログラムの作成支援を行う NPO 等地域活動団体等を対象とした人材・ネットワークの支援をするもので、高知県では両方を兼ねた内容を 1 回、徳島県、香川県、愛媛県においては、それぞれの内容を各県 2 回、計 6 回、総計 7 回を開催し、それぞれ参加者が意見交換等相互に交流できる場となるよう、ESD 活動パネルの展示などを含め、工夫した。

- 研修・ワークショップの開催アレンジを通じて、各県実行委員会委員やワーキンググループ委員が、四国 EPO や中国四国地方環境事務所高松事務所との連携を強化することができた。結果、香川県善通寺市教育委員会、徳島県阿南市教育委員会、愛媛集団学習研究協議会の協力を得て、予想を超える多数の教員を対象に ESD の普及啓発を行うことができ、地域ぐるみで ESD を推進することができるネットワーク構築の基盤づくりができた。各県の研修・ワークショップ開催の詳細は、以下のとおりである。

開催地	開催日	開催場所	参加者数
徳島県	2015 年 12 月 14 日	阿南市文化会館	37 名
	2016 年 1 月 30 日	神山町	20 名
香川県	2016 年 1 月 20 日	旧善通寺偕行社	205 名
	2016 年 1 月 23 日	善通寺五岳の里市民集いの丘公園	24 名
愛媛県	2015 年 11 月 27 日	松山市立清水小学校	24 名
	2016 年 2 月 27 日	松山市青少年センター	26 名
高知県	2015 年 11 月 7 日	高知大学朝倉キャンパス	33 名
合計 7 回			369 名

- 本年度の取り組みを含めた過去 3 カ年の事業内容・成果をはじめ、ESD の推進に役立ち、利用できるウェブサイトや専門的な相談機関等の情報などを包括的にわかりやすくまとめた冊子「四国の ESD3 年間の歩み」(A4、フルカラー、56 ページ)を 500 部作成した。本冊子は、実行委員会委員やワーキンググループ委員会委員、実証校など関係者および四国 ESD 実践者集会参加者、四国 EPO 運営委員等に配布した。

⑤地域版 ESD プログラムに関する調査

- 地域版 ESD プログラムの実証と検証の実施にあたり、実行委員、ワーキンググループ委員、実証関係者および研修・ワークショップの参加者等に対して、実証の効果、ESD に対する理解・今後の課題等に関するアンケートや個別のヒアリング・調査を実施してまとめ、ESD 専門家による結果の分析を行った結果、その効果とともに課題・改善点についても抽出することができた。

⑥全国事務局、「西日本 ESD ミーティング 2015」との連携等

- 全国事務局主催「全国連絡会」および「ESD 成果報告会および交流会」、中国四国地方環境事務所主催「西日本 ESD ミーティング 2015」に本事業代表者が出席して、積極的に必要な情報提供等を行った。
- 中国四国地方環境事務所高松事務所主催「ユニバ ESD 四国大会」や四国内の ESD 関連イベント等への参加、新聞社等メディアへの周知、ラジオ番組への出演等を通じて、本業務の広報と ESD の普及啓発を行った。

⑦四国 ESD ネットワーク形成のための「四国 ESD 実践者集会」の実施

- 四国 EPO との連携により、四国 EPO 運営委員と四国 ESD 実行委員会およびワーキンググループ委員会委員と関係者が実践者として一堂に会し、3 カ年の実証プログラムや評価についての紹介、総合的な学習と ESD の違いなどについての発表や意見交換ならびに SDGs に関する動向に関する情報提供などを行った。パネルトークでは、井上修氏(善通寺こどもエコクラブ代表)、細川威典氏(阿南市立羽ノ浦中学校校長)、竹下浩子氏(愛媛大学教育学部准教授)、内田洋子(四国 EPO マネージャー)、星野智子氏(環境パートナーシップ会議副代表理事)が登壇し、四国での ESD 実践事例を紹介し、普及活動を行った。

6. 四国地方を中心とした青年層による「ユニバ ESD 四国大会 2016」開催等業務

- 前年度実施した「平成 26 年度中国四国地域を中心とした青年層による ESD ユネスコ世界会議支援等事業」において開催した「ユニバ ESD 大会」のフォローアップとして、その後の四国地方内の青年層における ESD 活動の取り組みについて確認し、深化・拡充を図るため「ユニバ ESD 四国大会 2016」を 3 月 5～6 日、香川県青年センターにおいて 1 泊 2 日で開催し、総勢 49 名が参加した。
- この大会では、昨年度の大会参加者を含めた青年層を対象に、これまでの活動の発表や議論等を通じて ESD のさらなる推進の必要性を共通認識として捉えると同時に、参加者間による主体的なネットワーク化を強化することを目的のひとつとした。
- 募集については、NHK ラジオ番組「おはよう四国」などのメディア、メールマガジン、WEB 等により広報を行い一般に周知を図ったほか、大会についてのチラを作成し、四国 4 県の全ての高校(197 校)、短期大学(12 校)、大学(16 校)に各 8 部を郵送し、広報協力を依頼した。

- 本大会では、ESD の専門家による講演のほか、分科会(①The ESD 祭り・企画、②ESD フェアトレード商品と教材開発、③食品ロス問題と ESD)のディスカッションでの専門家および四国 EPO からの具体的な助言や情報提供を通じて、青年層の ESD 活動の活性化を促進することができた。また、参加者それぞれが取り組んでいる ESD 活動についても発表・共有を行った。
- 講師に星野智子氏(一般社団法人環境パートナーシップ会議)より、基調講演として持続可能な開発目標(SDGs)の概要について発表があり、ESD も SDGs の目標 4 に組み込まれていることから、SDGs のポイントと照らし合わせながら本大会の各分科会の活動の意義について確認した。

- 「今後の活動」にどう活かすかという視点では、即座につなぐ案として、本大会の分科会のひとつで議論した「ESD まつり」の模擬開催を、2 週間後となる 3 月 19 日(土)、南国市立清和女子中高等学校において実施することが議論され、清和女子中高等学校教員と EGN の関連事業により、実現させることができた。その「模擬 ESD まつり」を高校生が中心となって準備・開催し、本大会参加者のうち 18 名が参加し、新規参加者 16 名を含む計 34 名が参加した。

Ⅲ. 教育・ネットワーク事業

1. 講師派遣および持続可能な開発のための教育（ESD）普及・促進

- 総合的な学習の時間（国際理解教育・環境教育・平和教育・人権教育）の講師、あるいは、シンポジウム・セミナー等のパネリストとして、小・中・高校、大学、教員、その他（NPO、企業、行政等）からの派遣依頼に応じて、ニーズに合った講演・ワークショップ等を行った。
- 松山市「平和の語り部」派遣事業、松山国際交流協会ESDコーディネーター派遣制度、愛媛県環境マイスター、自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー派遣制度、外務省NGO相談員、内閣官房地域活性化伝道師等、さまざまな仕組み・制度を活用して実施した。
- 2015 年度の講師派遣等の実績は一覧表の通りである。

No.	月	日	曜日	名称/内容	場 所	主 催	参加者・対象	対象人数	担当者/同行者
1	4	25	土	新玉小学校総合 打合せ	えひめグローバルネットワーク	新玉小学校	教員	1	竹内よし子
2		30	木	平和の語り部 立岩小学校	立岩小学校	松山市	小学生	25	
3	5	9	土	葉山芸術祭 武器アート展ギャラリートーク	葉山芸術祭	葉山芸術祭	一般	20	
4		12	火	高知工科大学NPO論	高知工科大学	高知工科大学	大学生	60	竹内よし子 高山莉菜
5		14	木	小野中 国際理解講座①	小野中学校	小野中学校	中学生	20	竹内よし子 高山莉菜 亀山公実子
6		19	火	清水小学校4年生 大川の学習	清水小学校	清水小学校	小学生	72	竹内よし子
7		20	水	平和の語り部 浅海小学校	浅海小学校	松山市	小学生	28	
8		21	木	小野中 国際理解講座②	小野中学校	小野中学校	中学生	20	竹内よし子 高山莉菜
9		22	金	松山工業高校生 受入れ	えひめグローバルネットワーク	えひめグローバルネットワーク	高校生	7	竹内よし子
10		26	火	小野中 国際理解講座③④	えひめグローバルネットワーク、EPIC	小野中学校	中学生	20	竹内よし子 高山莉菜
11		29	金	松山東高校SGH部 ボランティア受入	えひめグローバルネットワーク	松山東高校SGH部	高校生	5	竹内よし子
12	6	1	月	清水小学校4年生 大川の学習	清水小学校	清水小学校	小学生	72	
13		4	木	小野中 国際理解講座⑤	小野中学校	小野中学校	中学生	20	竹内よし子 高山莉菜
14		8	月	新居浜ESD支援	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	24	竹内よし子 内田洋子
15		9	火	新居浜ESD支援	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	11	竹内よし子 内田洋子
16		10	水	千葉商科大学	千葉商科大学	千葉商科大学	学生・一般	1000	竹内よし子
17		11	木	新玉小学校 特色ある学校づくり推進委員会	新玉小学校	新玉小学校	教員・PTA関係者	10	
18		19	金	国際教員養成協議会（ICET）	鳴門教育大学	ICET	教員	100	
19		23	火	新居浜ESD支援	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	23	内田洋子 溝渕雅子
20		25	木	愛媛大学 教育学部 消費者教育	愛媛大学	愛媛大学	大学生	60	竹内よし子 内田洋子

21	7	2	木	愛媛大学　教育学部　消費者教育	愛媛大学	愛媛大学	大学生	60	内田洋子
22		4	土	松山東・南・中央高校　フェアトレード勉強会	松山東高校	高校生	高校生	10	竹内よし子
23		6	月	平和の語り部　東雲小学校	東雲小学校	松山市	小学生	53	
24		6	月	新玉小学校教員との打合せ	新玉小学校	新玉小学校	教員	3	竹内よし子 高山莉菜
25		10	金	高知大学　国際協力論	高知大学	高知大学	大学生	60	竹内よし子 高山莉菜
26		14	火	新玉小学校　6年生総合	新玉小学校	新玉小学校	小学生	93	竹内よし子 高山莉菜 木村英理子
27		12	日	香川寒川公民館講演	寒川公民館	寒川公民館	一般		溝渕雅子
28		23	木	新玉小学校　サマーチャレンジ	新玉公民館	新玉小学校	小学生・中学生	20	竹内よし子 高山莉菜 マコメ、ムタ
29		10	土	広報スクールでの活動発表	これからの学び ネットワーク	これからの学び ネットワーク	一般	5	亀山公実子
30		28	火	新玉小学校　ESD教員研修	新玉小学校	新玉小学校	教員	29	竹内よし子 木村英理子
31	8	5	水	新居浜市ESD研修会（講演会）	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	60	竹内よし子
32		29	土	日本青年国際交流機構31回全国大会	高知市文化プラザ かるぽーと	内閣府、日本青年国際交流機構、青年国際交流推進センター、高知県青年国際交流機構	一般	30	竹内よし子 高山莉菜
33		29	土	持続可能な未来を創るための環境と女性・ジェンダー意見交換会/キックオフイベント	富士川町民会館	北九州 サスティナビリティ研究所	一般	15	亀山公実子
34	9	17	木	小野中　国際理解講座⑤	小野中学校	小野中学校	中学生	20	粂井千絵 関家麻希
35		24	木	小野中　国際理解講座⑥	小野中学校	小野中学校	中学生	20	竹内よし子 関家麻希 マコメ
36	10	1	木	小野中　国際理解講座⑦	小野中学校	小野中学校	中学生	20	高山莉菜
37		2	金	新玉小学校3年生 ちがう国でも同じこと	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	竹内よし子 マコメ、ムタ アンジェラ 高山莉菜 河崎涼花
38		5	月	新玉小学校3年生 ちがう国でも同じこと	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	高山莉菜 河崎涼花
39		6	火	新玉小学校3年生 ちがう国でも同じこと	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	竹内よし子 高山莉菜 アンジェラ
40		8	木	小野中　国際理解講座⑧	小野中学校	小野中学校	中学生	20	高山莉菜
41		9	金	第38回東海北陸地区生協行政合同会議	KKRホテル金沢	石川県 生活協同組合連合会	一般	100	竹内よし子
42		14	水	上林小学校講演	上林小学校	上林小学校	小学生	24	
43		18	日	松山市平和記念事業「平和のつどい」	松山市 コミュニティセンター	松山市	一般	100	
44		26	月	新玉小学校2年生　総合	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	
45		26	月	新玉小学校4年生　総合	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	
46		29	木	NPOマネジメント講座	愛媛県総合社会福祉会館	愛媛県社会福祉協議会	一般	60	

47	11	6	金	宮前小学校6年生　総合	宮前小学校	宮前小学校	小学生	93	竹内よし子 高山莉菜
48		7	土	ESD研修（高知）	高知大学	環境省中国四国地方 環境事務所、四国EPO	一般	30	竹内よし子
49		11	水	新玉小学校6年生　総合	新玉小学校	新玉小学校	小学生	90	竹内よし子 マコメ、ムタ、 アンジェラ
50		12	木	新居浜市第2回ESD主任研修会	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	15	竹内よし子
51		15	日	久谷中学校　講演	久谷中学校	久谷中学校	中学生	200	
52		27	金	ESD研修（愛媛）	清水小学校	環境省中国四国地方 環境事務所、四国EPO	一般	22	
53	12	9	水	新居浜市第2回ESD主任研修会	新居浜市文化センター	新居浜市教育委員会	教員	13	竹内よし子 内田洋子 溝渕雅子
54		11	金	立命館大学　講演	立命館大学	立命館大学	学生・一般	30	竹内よし子
55		12	土	あーすぷらざ 武器アート展ギャラリートーク	あーすぷらざ	あーすぷらざ	一般	14	
56		16	水	西日本ESDミーティング	岡山国際交流センター	環境省中国四国地方 環境事務所	一般	50	高山莉菜 亀山公実子
57	1	28	木	高知市旭小学校5，6年生総合	高知市立旭小学校	えひめグローバル ネットワーク	小学生	148	竹内よし子
58		26	金	国際大学武器アート展講演	国際大学	国際大学	一般	50	
59		29	月	松山東高校SGH部　カルタボランティア	えひめグローバル ネットワーク	えひめグローバル ネットワーク	高校生	4	
60	3	8	火	角野小学校モザンビーク帰国報告会	新居浜立角野小学校	新居浜市立角野小学校	小学生	110	竹内よし子 小松柊成
61		12	土	松山市防災復興支援キャンペーン	大街道	松山市	一般	50	竹内よし子
62		18	金	清水小学校6年生ネパール帰国報告	松山市立清水小学校	松山市清水小学校	小学生	78	竹内よし子 高山莉菜
63		24	木	阿南高専で外務省NGO相談員と語る！ 国際協力とESD＋SDGs	阿南高専	えひめグローバル ネットワーク	高校生	20	竹内よし子
64		30	水	グローバル・ローカルかるた 発送ボランティア、四国ユース意見交換会	えひめグローバル ネットワーク	えひめグローバル ネットワーク	高校生	14	
合　計								3,881	

2. 外務省 NGO 相談員業務

- 外務省の委託業務として、2015 年 5 月 11 日より 2015 年 3 月 31 日まで、外務省 NGO 相談員として、月～金曜日、10 時～17 時まで、竹内よし子（正）と新居啓司（副）の 2 名および、3 名の補助スタッフにより相談業務に応じた。

①照会・相談対応

- 平成 27 年 5 月～28 年 2 月までの相談対応合計数は、729 件（月平均 66.2 件）であり、毎年、増加している。内容は、開発教育に関する相談 156 件が最も多く、組織運営マネジメント（事業面、広報面）、NGO・NPO 活動についての相談が多かった。また、相談者は、NGO 関係者・設立希望者が最多で、教員・行政・学生・高校生以下と続いている。
- 今年度は特に、例年に比べて行政からの相談が多かったことから、当団体が地域と連携して培ってきた信頼関係により、事業計画に関する具体的な相談を受けることにつながったと考える。また、県庁職員の「外務省 NGO 相談員制度」への理解が深まったことで、外務省と地域の連携について、その必要性や重要性、また、協働の可能性への理解を深めてもらうことができた。
- ネットワークを活かして得られるさまざまな国際協力活動の現状や国際理解教育・ESD への取り組み、勉強会・セミナー等の開催情報などを、ホームページや掲示板を活用して広く市民に提供し、相談対応に活用することができた。

②出張サービス

- 国際協力・交流等イベントへの出展、教育機関等での講演、JICA 国際協力推進員との勉強会など、四国全県で合計 5 件（徳島県 1、香川県 2、愛媛県 1、高知県 1）を実施した。特に徳島、香川については、今回、JICA 国際協力推進員との連携を深める機会となるよう、「協働」を意識して実施した。

- 当団体の強みである教育分野とのつながりを活用して、各種学校への出張サービスを実施し、講演・ワークショップなどの方法で国際協力活動や ODA、NGO、ESD、MDGs、SDGs などへの理解を深めることができた。
- JICA 国際協力推進員を対象に開催した外務省 NGO 相談員制度に関する勉強会では、相互に活動内容を理解した上で、どのような連携ができるか意見交換を行うことができた。本会合は、外務省 NGO 相談員全員と JICA 国際協力推進員の合同会議が開かれる 1 週間前のことであり、四国地域の動きと全国の動きが連動して、非常にタイムリーで内容も充実した良い意見交換の機会となった。その後も、徳島での出張サービスの機会も連携することができた。

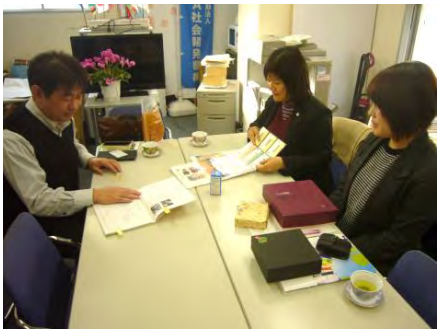
- 高知への出張サービスについては、「グローバル・ローカルかるた」づくりとの連動性を持たせることができた。
- 今年度実施した出張サービスは以下の通り。

NO.	実施月	出張サービス先	形　態	企画概要	開催場所
1	10月12日	香川国際フェスタ2015における相談対応サービス（香川県）	相談対応サービス	相談ブースを設けて市民の国際協力に関する質問や相談に対応するとともに、NGO相談員のチラシの配布・ポスターの展示を行うことで普及啓発を行った。	アイパル香川
2	11月24日	国際協力推進員との勉強会（香川県）	勉強会	四国4県の国際協力推進員に外務省NGO相談員制度の説明を行い、具合的な連携の可能性について意見交換を行った。	JICA四国
3	1月28日	高知市立旭小学校5，6年生を対象とした国際理解と人権にかかわる講演（高知県）	講演	特定非営利活動法人ACEが作成している「チョコっとカルタ」を通じて、アフリカの文化や歴史、チョコレートやカカオの知識、それに関連する児童労働やフェアトレードに関する知識を学んだ。後半は、特に食品ロスの問題に注目しながら世界で起こっている現状について紹介した後、モザンビークの平和構築活動「銃を鍬へ」や「武器アート」について説明した。	高知市立旭小学校
4	2月28日	国際交流市民ボランティア入門講座（愛媛県）	相談対応サービス	国際協力・国際交流に関心のある市民を対象としたイベントでブース出展し、個別の相談対応を実施するとともに、冊子「四国国際協力団体とODA」を配布し普及啓発を行った。	松山市男女共同参画推進センター
5	3月24日	阿南高専で外務省NGO相談員と語る！国際協力とESD＋SDGs（徳島県）	相談対応サービス、講演	阿南工業高等専門学校の再生可能エネルギー研究会の生徒による、東南アジアの留学生と協力して実施する研究交流の発表の後、世界の現状や四国のNGOの取り組み、ESD、SDGsに関する講演を行った。後半は、持続可能な社会づくりのために自分たちがどのような関わり方ができるかという視点で意見交換を行う中で、徳島のJICA国際協力推進員にも参加してもらった。	阿南工業高等専門学校

③広報業務

- 団体独自のチラシを 5,000 枚(A4 カラー両面)作成し、四国 4 県の小学校 871 校（愛媛 307、高知 200、徳島 189、香川 175）、中学校 419 校（愛媛 139、高知 117、徳島 88、香川 75）に対し、ESD 推進拠点のひとつである環境省四国環境パートナーシップオフィスの協力を得て、相談員のチラシを郵送した。
- 平成 27 年度相談員ロゴマークを名刺に印刷することにより、年間約 1,000 名に広報した。
- 当団体ホームページ、フェイスブックなどの SNS を活用し、相談員制度の広報を行った。当団体が作成したチラシの裏面に、相談対応がどういうものか「よくある質問集」より抜粋して例を示し、制度の活用が具体的に促進されるよう工夫した。
- SDGs のような新たな枠組み・トピックに関しても理解を深めつつ、相談員制度が活用しやすくなる環境を整えるため、チラシでも SDGs のアイコンを用いて PR 度を高める工夫を行った。
- NHK ラジオ番組「おはよう四国」において、NGO 相談員制度、出張サービスの実施について広報を行い、四国全域を対象に広く利用を呼び掛け、PR した。
- 第 2 回連絡会議で民放による国際協力広報番組づくりについて情報収集し検討した。
- 平成 26 年度外務省 NGO 相談員制度において作成した冊子「四国の NGO と ODA」を活用して、地域性の視点を持った四国の国際関連情報を発信し、NGO 相談員制度の広報を行った。本件配布については、報道機関にプレスリリースし、取材対応した。
- 地域課題とグローバルな課題の「見える化」を進め、ODA や NGO 活動への理解を深めていくためのツールとして「グローバル・ローカルかるた」を 500 部製作し、四国内の NGO21 団体、高等学校 189 校（愛媛 64、高知 44、徳島 36、香川 45）に 2 セットずつ配布した。作成・発送までの段階で、小学生から大学生までの計 200 名を超える市民が関わることができた。

④NGO 相談員間の連携強化



- 相談員同士の連携強化を図るために、中国ブロック（AMDA 社会開発機構）、九州ブロック（NGO 福岡ネットワーク）を訪問し、フェアトレードの促進や開発教育・国際理解教育・ESD の連携などについて意見交換を行った。
- FUNN への訪問では、フェアトレードの促進に関する意見交換や、開発教育に着目した教材開発の可能性について、当団体が現在開発中の教材を参考に、具体的な改善点などについて意見交換を行った。
- AMDA 社会開発機構では、教材の開発や、企業との連携による寄付付き商品の開発などについて、本団体が行っている具体的な事例を基に意見交換を行った。また、岡山市役所の ESD 担当者に途中から同席してもらったことで、両者の顔が見える関係をつくることができ、学校現場などでの具体的な連携について意見交換の場を持つことができた。
- 2 団体と意見交換を行う中で、教材の開発や学校現場への働きかけによる連携など、テーマについて一定の方向性を見出すことができた。

⑤JICA および国際協力推進員との連携

- 四国 NGO ネットワーク(SNN)と JICA 四国が共同で年 2 回四国内で開催している「四国 NGO 研修」と「NGO・JICA ラウンドテーブル」において、外務省 NGO 相談員と JICA 国際協力推進員の連携促進のための情報共有・意見交換を図った。
- JICA が進める中小企業の BOP ビジネス展開については、企業からの相談に対応する形でつなぐことはできたが、勉強会は企業と NGO のニーズのマッチングが十分でなく開催に至らなかった。
- SDGs に関しては、ラウンドテーブルの機会に四国内で実施している勉強会開催状況などを紹介し、共有した。
- 外務省 NGO 相談員全員と JICA 国際協力推進員の合同会議が開かれた第 2 回 NGO 連絡会の前後で、JICA 四国と NGO 相談員が意見交換することができ、四国地域の連携強化が実施できた。特に徳島県の JICA 推進員との連携は、新規着任直後に出張相談サービス企画で実施したことで、今後、愛媛と徳島で一番の遠距離だがその距離を縮めることができた。

⑥NGO 相談員連絡会議への参加

- 第 1 回連絡会議（7 月、東京）では、当団体から相談員 2 名が参加し、積極的に意見交換に参加した。特に、制度の効果的な「広報」に関する意見交換、他団体からのヒアリングを行い、NGO 相談員同士の連携についても意見交換を行った。
- 第 2 回連絡会議（12 月、兵庫）では、JICA との連携についての議論が深まりつつある中、連絡会議前後で JICA 四国との意見交換を深めてから参加した。会議開催団体より開催前に会議の進行等に関する相談があったので、メールのやり取りなどを通じて、アレンジの方法について情報提供、連携した。チラシ作成に関して、これまでのデザイン等に関する経緯を説明し、今回の会議では、特に当団体から新たなデザインサンプルを用意して意見交換を行った。また、会議終了後にも、改めてアンケートを実施し、全 NGO 相談員から意見を集約し、外務省とも密に連絡調整を行った。

3. アジア・アフリカとつながる四国 SDGs ネットワーク構築プロジェクト

① 四国 SDGs ネットワーク構築

- これまでに本事業でアジア・アフリカ・四国がつながるテーマについて情報収集を進め、有機的なネットワークの在り方を検討してきた中で、ネパールの震災、モザンビークでの干ばつや洪水などの自然災害、四国での南海トラフ地震への対策など、「自然災害」というテーマでつながりをつくることができると考え、今年度は SDGs の目標 11「持続可能なまちづくり」に関連して、地域の持続可能性を考え、防災への取り組みに焦点を当てた SDGs 勉強会・イベントを実施した。また、特にユース世代とのネットワーク構築に向けて、高校生や大学生を主体とした勉強会も実施した。詳細は以下の通り。

第 1 回：災害時協働型支援の必要性

日　時：6 月 7 日（日）15:30～18:15
場　所：愛媛大学法文学部講義棟 1 階 101 教室（愛媛県松山市）
共　催：NPO 法人えひめ 311
参加者：31 名
内　容：SDGs の 17 項目のうち、目標 11「持続可能なまちづくり」に関連して、災害に強い地域づくりに先進的に取り組んでいる羽賀友信氏（長岡協働型災害ボランティアセンター センター長）を招き、講演会を行った。その後、愛媛・四国における災害に強い地域づくりについて参加者同士で意見交換を行い、地域の持続可能性とネットワークづくりについて議論を深めることができた。特に、えひめ 311 と協働で具体的な減災社会に取り組む方法について意見交換できた。

第 2 回：東雲インターナショナル防災

日　時：12 月 19 日（土）11:00～14:00
場　所：松山市東雲公園グラウンド（愛媛県松山市）
参加者：47 名
内　容：第 1 回勉強会のフォローアップとして、松山市東雲公園にて留学生・地域の人を対象とした防災イベントを開催した。愛媛大学に隣接していることから、地域に外国人留学生、関係者が在住している中、地元の人との顔が見える「お互いさまの関係」づくりを目的に実践的な試行を行った。イベントでは、地域住民が運用しているコミュニティファームで採れた野菜を使った炊き出しや太陽熱ボイラー、自転車発電の説明・体験、消防署職員による情報提供、消火訓練体験、松山市危機管理課が貯蔵する災害用グッズの紹介、多言語防災ビデオの上映などを行った。当日は、留学生や高校生、行政職員、教員、地域の方など多様な主体が参加するとともに、NPO 法人えひめ 311、NPO 法人シェアライフデザイン、東雲町内会が協力団体となって開催したことで、今後のさらなる連携にもつながり、ネットワーク構築に向けた一歩を踏み出せた。

第 3 回：ホンモノから学ぶ持続可能な地域づくり in 神山
日　時：1 月 31 日（日）9:15～14:30
場　所：工房山姥、神山町農村環境改善センター（徳島県名西郡神山町）
参加者：15 名
内　容：地域と世代を超えた地域交流の場を創出し、地域から世界をつなげる人材の育成に取り組む、株式会社リレイションの協力を得てフィールドワーク、勉強会を開催した。前半は本団体が所有する工房にて、まき割などの田舎暮らし体験を行い、後半は森良氏（エココミュニティセンター（ECOM）代表）コーディネートによる、生物多様性ワークショップ、祁答院弘智氏（株式会社リレイション）による神山地域で株式会社シレイションや、NPO 法人グリーンバレーが実践する具体的な活動内容の発表を行った。特に、地域滞在型人材研修「神山塾」、空き家再生プロジェクト、ワーク・イン・レジデンス事業など、外部からの人材を活用して地域活性化に取組む事例についての紹介など、一つのコミュニティの中で持続可能な地域社会づくりを実践している一つのモデルとして、ケーススタディを行うことができた。

第 4 回：SDGs 勉強会 in 香川「ユース×SDGs＝サステナブル四国」
日　時：3 月 6 日（日）13:00～14:30
場　所：香川県青年センター大会議室（香川県高松市）
参加者：28 名
内　容：四国各地域で ESD に取り組む高校生、大学生を対象に、同日同会場で行われた「ユニバ ESD 大会 2016（環境省中国四国地方環境事務所高松事務所主催）」に参加した学生が参加し、今後も学生同士の交流、活動の場を継続してつくっていくための意見交換会を行った。その中で、昨年度作成した HP の活用についても議題にあがり、活用方法について今後も検討していくこととした。さらに、3 月 19 日（土）に清和女子中高等学校（高知県南国市）にて、ユースを対象とした交流会「模擬 ESD まつり」を実施することとなり、今後の計画を立てることができた。

第 5 回：模擬 ESD まつり
日　時：3 月 19 日（土）13:15～15:30
場　所：清和女子中高等学校本館ロビー（高知県南国市）
共　催：清和女子中高等学校、四国環境パートナーシップオフィス
後　援：環境省中国四国地方環境事務所高松事務所
参加者：33 名
内　容：清和女子中高等学校ユネスコスクールプロジェクト実行委員会の企画協力を得て開催し、前回の勉強会参加者を中心とした高校生、大学生が多数参加した。前半に、当団体より ESD、SDGs に関連する情報提供を行った後、参加者による活動発表を行った。①愛媛県立松山東高校：スーパーグローバルハイスクール（SGH）部のフェアトレード普及活動、②愛媛県立北条高校、私立済美高校：地域資源を活用した商品開発、ユース勉強会開催、③高知大学、清和女子中学校：ホタル再生プロジェクト、④愛媛県立上浮穴高校：間伐材を活用したペルーの楽器（カホン）制作、体験についてそれぞれ発表を行い、今後もユースを中心とした実践型のネットワークを構築していくための学びあいの場となった。

第 6 回:四国ユース意見交換会
日　時:3 月 30 日(水)
場　所:当団体事務所(愛媛県松山市)
参加者:13 名
内　容:愛媛県内の高校生が主体となって四国ユース意見交換会を実施し、愛媛県立北条高校、済美高校、愛媛県立松山東高校、阿南工業高等専門学校の高校生と、愛媛県出身の大阪産業大学生、種智院大学生が参加して、今後の活動の進め方について意見交換を行った。どのような取り組みであれば地域の課題解決につながるか、実現の可能性を踏まえて今後も引き続き検討を進めていくこととなった。

- SSN 構築に向けて、他団体が開催する会議、勉強会等に参加し情報収集を行うとともに、関係者との意見交換を行った。また、中学校、大学などでの環境・国際に関係する授業での情報収集、NGO 関係者や ESD 関係者が参加する会議やイベント等における、四国での SDGs の取り組みについての情報発信を行った。
- 高知工科大学マネジメント学部と連携し、モザンビークのインコマテ川と高知県の物部川流域の共通課題解決に向けた議論・提案を行う予定としていたが、本学部のキャンパスが変更になったことから先方との連絡調整がうまく実施できず、担当教員との意見交換のみに留まった。次年度は、当団体が受託している環境省四国環境パートナーシップオフィス事業との連動性を踏まえて計画を立て、実施に向けて進めていきたい。
- 四国青年 NGO HOPE 主催の学生向け合宿への参加、連携については、環境系合宿「四国ギャザリング」の関係者と意見交換をしたものの、スケジュールの関係上、実施には至らなかった。本件については、次年度も引き続き連携について検討していく。
- 今年度は特に、災害に強い地域づくりを共通テーマにした勉強会やイベントなどを実施することができ、年間を通して SDGs の 17 項目のうち的を絞ったつながりのある取り組みとなった。
- 四国 SDGs ネットワーク構築に向けて NGO、NPO 関係者、学生の主体的な参加を促しつつ SDGs についての学びを深め、情報共有を行うことができた。その中でも、NPO 関係者や中高大学生などのユース世代との連携、ネットワーク構築として、愛媛大学学生、松山大学学生、愛媛県立松山東高校 SGH 部、済美高校、済美平成中等教育学校放送部、松山市立小野中学校生徒などと、環境、国際、フェアトレード、防災などのキーワードでつながることができた。
- ネットワーク構築に向けて、他団体が開催する多様な会議、勉強会等へ参加し、環境教育、防災、自然エネルギー、国際協力などに携わる関係者との顔が見えるネットワークをつくることができた。

②現地調査と課題の明確化に向けたフィールドワークの実施
第 1 回:モザンビーク(9 月 11 日～22 日)
場　所:マプト市、モアンバ郡
参加者:5 名
・課題の明確化を目的に首都マプトと、そこから約 100km 離れたモアンバ郡マレンガーネ地区のシニャングァニーネ村を訪問した。シニャングァニーネ村での視察では、昨年度勉強会を行ったアフリカゾウについてのヒアリングや、村の女性を対象とした裁縫訓練などを行った。
・特に、裁縫訓練では SDGs の 17 項目のマークの刺繍を行いながら目標の内容について説明を行った。単に現金収入のためだけではなく女性たちが学びながら働くことができる場として、村の女性 3 名がリーダーとなり、「tuanano トゥアナーノ(現地語で「フレンドシップ」の意)」というグループが結成された。
・作成した SDGs の刺繍は、今後、開発教育の教材として活用することとし、今年度はサンプルの作成を行った。

第 2 回:ネパール(2 月 20 日～24 日)

場　所：カトマンズ市
参加者：2 名
コーディネーター：Ram Chandra Bhusal 氏（ネパール JICA 帰国研修員同窓会事務局長）

・今年度、四国で開催している SDGs 勉強会でも 2 度テーマとして取り上げている「防災」に関連して、昨年、震災が起こり大きな被害を受けたネパールを視察訪問した。

・四国内でネパール支援を行っている CCWA 愛媛の会から事前にヒアリング・情報収集を行い、災害支援を通じた SSN の意義について相互理解を深め、ネットワーク構築を深めた。

・現地では、CCWA 愛媛の会が連携しているネパール JICA 帰国研修員同窓会（JAAN）関係者をコーディネーターとし、Naulin high school や Sapatar 地区を訪問し、現地の青少年 10 名に地震が起きた際の状況や、震災後の暮らしについてヒアリングを行った。震災から約 1 年経った今でも、建築物の修繕作業は続いており、観光資源や住居に大きな被害を受けたことで、現地の人々の生活にも影響を与えていることを確認した。

・今年度、環境省「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係る ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務（四国地域）」の一環で、松山市立清水小学校 6 年生がネパールの衣食住、文化、災害などについて学習を行ったことから、ネパール支援団体と現地のパイプづくりのサポートを行うことを目的に、本校の児童が集めた支援物資（文房具やぬいぐるみなど）を、Naulin high school や Sapatar 地区の青年、Gyanodaya higher secondary school の幼児たちに手渡した。

・カトマンズ郊外にある山間部において JAAN が実施する、女性対象プロジェクトの視察を行った。JAAN は、カトマンズの 3 つの地域で、16 歳以上の女性を対象に農業指導、教育支援（文字の読み書き等）などを実施しており、今回は、そのうちレレ地区、ノル地区の 2 地域を訪問した。女性グループへのヒアリングも実施し、コミュニティの中で野菜を育てて販売し収入を得て生活に役立てていることや、JAAN が取り組む女性の自立支援活動について情報収集することができた。

3. 協働オフィス運営

- 第 3 森ビル 1F「協働オフィス」を、NPO 法人えひめ 311（東日本大震災被災者支援団体）と協働で活用した。
- 協働オフィスの活用度を検討し、新たな「協働」が生まれる場として活用する企画検討を行った。

4. 愛媛県中間支援組織連携

- NPO法人えひめリソースセンター、愛媛県社会福祉協議会、まつやま NPO サポートセンター等と連携し、四国 EPO の中間支援ネットワーク構築に関する意見交換、情報交換を行った。

5. 日本・モザンビーク市民友好協会事務局運営

- 「日本・モザンビーク市民友好協会」の事務局を担った。
- 一般財団法人世界野球推進財団と愛媛県の連携により、2014 年 7～8 月に愛媛県松山市で開催された「世界少年野球大会」にモザンビークから参加した少年・少女 5 名の現地でのフォローアップとして、9 月にモザンビークを訪問し、大学生 2 名が中心となり Feb.3 School において野球交流を行った。
- モザンビークで野球が継続できるよう、野球道具の寄贈を募ったところ、ボール、バット、ベース、グローブなどが多数集まり、9 月 14 日に小学校へ寄贈した。
- 当団体会議室において、愛媛大学のモザンビーク人留学生と中心とした意見交換会、食事会などを行い、友好関係を深めることができた。

6. 四国 NGO ネットワーク（SNN）事務局運営

- 「四国NGOネットワーク（SNN）」の事務局を担い、四国のNGOの情報をメルマガにて適宜配信するとともに、JICA 四国・SNN 共催の NGO 研修、ラウンドテーブルや、SNN 総会等開催に関わる活動を行った。

7. コグウェイ四国

- 今年度は、一般社団法人コグウェイ、コグウェイ四国が主催する「コグウェイ四国・ディスカバリーライド」が、開催されたため、四国 EPO スタッフが取材を行い発信した。

Ⅳ. 管理運営等

1. 組織運営

① 事務局運営

- 本部・愛媛県松山市および香川県高松市の四国 EPO 事業実施のため、フルタイムおよびパートタイムの人材を新規雇用しながら事務局の体制を整えた。
- モザンビーク事務所は、現地所長とパートタイムスタッフで運営しているが、事業の見直しとともに新たな雇用を検討した。

② 役員体制

- 2015 年度は以下の役員体制とし、役員間のコミュニケーションについては、理事メールやスカイプを活用しながら意見交換を図り、理事会を 4 回開催した。

【代表理事】	竹内よし子	えひめグローバルネットワーク代表理事
【理　　事】	上田　　稔	聖カタリナ学園法人事務局長
	常川真由美	四国 EPO 所長
	堀田　　学	社会保険労務士
	森　源二郎	四国糧油株式会社　代表取締役社長
	山田　美緒	サイクリスト
【監　　事】	鈴木　靖彦	JA えひめ中央
【顧　　問】	薦田　伸夫	弁護士

③ 広報

- 会員向けに簡易の活動報告便りと、武器アート展案内チラシや ESD 関連イベントのチラシを同封して情報発信を行った。
- 各種メディアの取材に応じ、新聞･テレビ･ラジオ等において EGN の活動や、他の市民活動の広報を積極的に行い、NPO/NGO 活動への理解や参加促進を図った。
- 今年度、当団体の活動が特集記事として掲載された主なものは、(特活)アフリカ日本協議会「アフリカ NOW･103 号」、(一財)自治体国際化協会「自治体国際化フォーラム 10 月号」、(一財)アジア･太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)「国際人権ひろば 11 月号」等。
- 杉田このみ氏(愛媛県出身映画監督･映像作家)の初版『アクション！地域を変える 8 人との対話』に当団体と武器アートを紹介していただいた。

2. 星岡土地売却処分

- 不動産会社を通じて売却の広報を行った結果、購入先が決定したため、11 月 9 日に売却処分を行った。
- 売却による現金の余剰について、長期借入金の返済について検討し、一部返済した。

以上

2015 年度決算報告書

第 11 期

自　2015 年 4 月 1 日

至　2016 年 3 月 31 日